

風俗人形

天理参考館は、海外布教を志す人々が世界各地の風俗・習慣・文化等について学ぶために創設された施設である。そのため各国の風俗人形を多数収蔵している。この中には中国の風俗を題材にしたものも含まれる。一例を挙げると、結婚の際に行う花嫁行列やチベット仏教の儀式など、中華民国時代（20世紀前期）の風俗を模した人形等がある。今回はその中から黄楊材で精緻に作られた風俗人形と、天津の工房「泥人張」で制作された土製の風俗人形を紹介する。

前者「黄楊製風俗人形」の表面は丁寧に磨かれてツヤがあり、人物の顔には目などが筆で描かれ、とても表情豊かである。また、黄楊材以外にも糸や布、紙、綿、竹ひご等を巧みに使用し、



図1 風俗人形“楽器の演奏”
台の幅 8.0cm。チャルメラを吹く。人物の高 7.5cm。
銅鑼、シンバル、太鼓など五種類の楽器を演奏している。
や農業・漁業（豚追い、脱穀、網で魚を捕る等）、街頭の風景（洗濯、凧あげ、母子の散歩等）などがある。図1は数種の楽器を演奏している場面であるが、太鼓を叩くバチは細い竹ひご、銅鑼のかけひもは糸である。



図2 風俗人形“腹裂きの刑”。
台の幅 7.5cm。最大高 6.5cm。
罪人の腹を切り裂く刑罰。執行人の衣装に「兵」の字が見える。



図3 風俗人形“蛤の精”。
台の幅 3.6cm。最大高 7.0cm。
蛤の化身である女性が貧しい男の妻になり、美しい布を織るという伝説がある。

可能な限り写實的に表現している。人形は全て板状の台に乗せられている。小型の台は約3cm四方から、大型の台は約8cm四方の大きさで、1枚の台に多人数が乗るものや、人物以外に牛や鳥を象ったものもある。

人形は全部で108点あり、ジャンルは多岐にわたっている。その大部分を占めるのが庶民の風俗を象ったもので、商売（露天床屋、辻占い、西瓜売り等）

（露天床屋、辻占い、西瓜売り等）や農業・漁業（豚追い、脱穀、網で魚を捕る等）、街頭の風景（洗濯、凧あげ、母子の散歩等）などがある。図1は数種の楽器を演奏している場面であるが、太鼓を叩くバチは細い竹ひご、銅鑼のかけひもは糸である。
次に多いのは刑罰の様子を象ったもので、中には“眼球えぐりの刑”や“腹裂きの刑”（図2）等かなり残酷な刑罰も見られる。その他に民話や芝居に出てくる想像上の人物を象ったものがあり、中国では妖怪として親しまれている“蛤の精”（図3）や、カラス貝に嘴を挟まれた鴨と漁師を配した“漁夫の利”などがある。

当館の創設者である中山正善は、1930年に現在の上海市内に位置する徐家匯地域でこれらを購入した。中山正善『上海から北平へ』（天理教道友社、1934年）によると、当時の徐家匯には大規模なキリスト教の修道院があった。修道院内には様々な施設が存在し、その一部である孤児院では、男児に学校教育を受けさせる傍ら、付設の木工所で職業訓練を施した。木工所では修道院で必要な日用品が作られたが、同時に

外国人向けの土産品等も製作・販売しており、これらに黄楊製風俗人形が含まれていたという。

特定の時代や地域の風俗を正確に表現した資料ではないかもしれないが、当時の外国人観光客の興味をひくには十分な魅力を持つ土産品だったと思われる。黄楊製風俗人形の一部は2014年現在、当館一階の「中国コーナー」に展示中である。

続いて天津市にある人形工房「泥人張」の土製風俗人形を紹介

したい。図4は西瓜売りを象った土人形である。粘土を手で捻って形を整え、表面に彩色を施している。手に団扇を持ちながら突き出した腹部を晒し、大きく口を開けた姿が、暑い夏に声を張り上げて西瓜を売る雰囲気をよく醸し出している。

人形の胴と頭部、腕部は別々に作られている。頭部（顔）は人物の表情を出すため念入りに成形され、首に付いた長い竹串を胴の穴に差し込んでいる。腕部は肘部分から伸びた針金を背中まで突き通すことで胴と繋いでいる。しかし可能な限り写実性を求めた為にバランスが悪く、背後にある二本の針金の補助無しでは自立が難しい。なお、右手の団扇は土製ではなく、薄い金属板の上に彩色して作られている。

『泥人張作品選』（人民美術出版社、1954年）によると、「泥人張」は張明山（1826～1906）によって創始された。彼は8才の時から父の張萬全と共に土製玩具を作り生計を立てていたが、18才で京劇役者の余三勝に瓜二つの像を作って高い評価を得、やがて世間に名を知られるようになる。その後第二代の張玉亭（1863～1954）、第三代の張景祐（1891～1967）、第四代の張銘（1916～1995）および張鉞（1927～1991）と技術は受け継がれ、現在は第五代となっている。

図4の作者は不明だが、1930年代から1940年代前半に蒐集されたことから考えて、おそらく張玉亭か張景祐の作品であろう。なお当館が所蔵する同時代の「泥人張」作品として、この他にも“油を売る行商人”など数点が存在する。

「泥人張」の工房は天津市の自然博物館付近にあり、2014年現在も製作が続けられている。当館では2001年に完成した新館での常設展示に使用するため、清末～民国期の商店模型および様々な商人を模した土人形を、同工房に計47点注文した（図5）。これらの一部は当館一階「中国コーナー」において、中国看板資料と同じ展示ケース内で公開している。



図5 「泥人張」の土人形“金魚売り”。2000年、天津市の「泥人張」工房にて製作。商人の高17cm。

当館が2000年に注文した作品の一つ。金魚が入った容器をのぞき込む子供たちの姿がほほえましい。



図4 「泥人張」の土人形“西瓜売り”。20世紀前半、中国にて蒐集。高24cm。